

HKSSH-JSSH Exchanging Travelling Fellow報告記

筑波大学医学医療系整形外科 講師 原 友 紀

2013年6月5日から6月14日まで、Travelling Fellowとして香港で研修をさせていただきました。第26回香港手外科学会およびCadaveric Workshopへ参加し、Prince of Wales Hospital, Tuen Mun Hospital, Queen Marry Hospital, Queen Elizabeth Hospitalおよび香港大学を見学させていただきました。

今回の香港手外科学会は11th International Meetings on Surgical Rehabilitation of the Tetraplegic upper limbとのCombinedでした。12人のInvited speakersによる20のlectureがあり、Tetraplegic hand surgeryの歴史を含めたoverviewから、拘縮・痙縮・疼痛の問題、手術の手技と適応、リハビリテーションの実際とその問題、FES (Functional Electrical Stimulation) の開発と臨床研究の結果、国際分類、精神的・社会的背景の研究に至るまで、脊損患者に対する上肢機能再建の現況と課題が議論されました。その他に29演題のHKSSH Free papersがあり、私は重症手根管症候群における母指対立再建術の適応決定における筋電図検査の重要性について発表させていただきました。学会はおおよそ200人弱の参加で医師・療法士・研究者そして患者様も参加していました。Tetraplegic hand surgeryの話題で特筆すべき内容はスウェーデンのProf. Jan FriedenのAlphabet procedure (一期的手指屈伸再建術)、脊損患者に対する神経移行術の報告、埋め込み型FESの市販後調査の結果です。実際に患者様に表面型のFESを装着し、デモを行いながらのlectureもありました。一つ一つの演題に対し、世界のtop surgeonsが徹底的に議論を交わし、非常に内容が深く有益な学術集会でした。

学術集会終了後、Cadeveric Workshopに参加するために中国の広州・南方医科大学へ移動しました。翌日は早朝より終日Fresh Frozen Cadaverで、肘伸展再建、母指・手指屈伸再建、intrinsic balancing, 神経移行術などの手術手技を6人の講師から直接教えて頂きました。やはり論文を読んだだけではわからないポイントや細かい工夫があり、Cadaverでの手術トレーニングの重要性を思い知りました。

脊損患者は先進国ではその数が減少し、高齢化しています。治療には専門的知識と経験、チームが必要であり、拘縮・spasticity、疼痛、排泄コントロール、患者の精神的問題や社会背景、長期に渡るリハビリに耐えうるモチベーションなど多くの問題に対応する必要があります。

決して簡単なことではありませんが、私は今回このような好機を与えられ学ばせて頂いた貴重な体験を活かし、脊損手の再建を始めたいと思っています。Dr. Bunnellはこのような言葉を残しています。“*When you have nothing, a little is a lot*”

私は帰国後すぐに、日本で脊損手の治療のご経験のある先生方に連絡し、手術や病院の見学をお

願いました。地域で脊損患者の急性期治療を担当する病院およびリハビリテーション病院に声を掛け、患者様の診察を開始しました。患者様の声を直接聞いて、あらためてこの分野を日本で再活性化する必要があるのではないかと感じています。日手会を通じ、ご経験のある先生方のご指導を賜ることができれば大変心強いと思っております。

今回の訪問中、香港手外科のメンバーの先生方には大変親切にして頂きました。異なった医療システム・環境に触れ、また多くの友人ができたことは、今後私が手外科医を続けていく上で大きな糧になったと思います。

最後に、今まで私を育てて下さいました落合直之名誉教授、西浦康正教授をはじめ手外科の諸先輩方、快く私を送り出して下さった筑波大学整形外科の皆様、そしてこの機会を与えて下さった日本手外科学会に感謝申し上げます。